

東アジアにおける高麗人蔘の国際市場

金 孝 仙

1. はじめに

高麗人蔘⁽¹⁾はもともと朝鮮(韓)半島の北端、中国との国境付近を原産地とし、韓国・北朝鮮や中国・日本・ロシアなど東北アジアで生産されてきた特用農産物⁽²⁾を指している。江戸時代以来、日本で生産されてきた高麗人蔘が近年生産量を減退させ、日本の高麗人蔘産業が“存亡の危機”にある一方、世界の高麗人蔘市場に君臨してきた韓国のそれも厳しい状況を迎えつつある反面で、開放経済体制のもとで急速な経済発展をつづける中国の東北地方(吉林省中心)で生産される低価格の人蔘が日本市場をも席卷しつつあるのが、1980年代後半以降の顕著な事実である。しかし、中国産の人蔘の品質には様々な問題が指摘されており、今日の高麗人蔘市場の最大の問題は、品質と価格の両面で韓・日・中の3国がどのような調和した関係を築き得るかというところにあると考えられる。本稿は、日本と韓国の高麗人蔘産業の現況とその輸出入の状況の把握を通して、東アジアにおける高麗人蔘の国際市場のあり方を明らかにすることを目的とする。

周知のように、今日の東アジアの経済関係において最も関心をあつめているのが、地域単位の新しい経済圏建設の構想であり、本稿の対象とする高麗人蔘産業についていえば、既に韓国タバコ人蔘公社が中国吉林省における人蔘生産に技術協力するという関係が生まれているが、最大のプロジェクトとして帰趨が注目されている豆満江流域開発計画においては現在のところ高麗人蔘産業の相互協力は考えられていない⁽³⁾。しかし「伝統産業」のイメージとは裏腹に、今日の先進工業国やNIE Sを含む東南アジア・東アジア地域での高麗人蔘消費量はめざましい伸びを示しているのが事実であり⁽⁴⁾、人蔘生産諸国間の競争の激化とその調整の必要性は、早晩、この地域の経済関係を前進させるために解決すべき課題として認識されることになると思われる。そのような意味でも、本稿の内容は現代的意義を持つものと考えられる。

2. 日本における高麗人蔘の輸出入の近況

近年の日本における高麗人蔘類消費の激増ぶりはめざましいものがある。紅蔘・白蔘・雑製

(1)日本では「朝鮮人蔘」「高麗人蔘」の呼称がひろく用いられているが、官庁統計などでは「薬用人蔘」とされている。本稿では「高麗人蔘」または、必要に応じて「人蔘」の語を用いる。

(2)拙稿「日本における高麗人蔘産業の歴史的考察」(日本商品学会『商品研究』44巻1・2号、1993年10月)参照。

(3)『月刊朝鮮資料』1993年の新年特別号『羅津・先鋒自由経済貿易地帯』(朝鮮問題研究所、1993年2月)

(4)拙稿「日本における高麗人蔘のマーケティングに関する基底的研究(1)」(近畿大学大学院商学研究科・経済学研究科『商経論究』第7号、1993年3月)参照。

品（生干し、湯通し）など高麗人蔘の第1次製品の国内市場への供給量は表1にみる通りであり、1980年の156トン（そのうち輸入品が73.7%）が、1986年には547トン（同92.1%）へ、1989年には989トン（同93.7%）になっている。これに、大部分は韓国産であるが「調整品」「製剤」などの第2次製品の輸入を加えると（1986年205トン、1990年285トン⁽⁵⁾）、国内消費の激増ぶりがさらに明瞭であろう。この間に国民の健康状態に特別に大きな変化がなかったとすれば⁽⁶⁾、高麗人蔘製品需要の急増は基本的にはひろく健康食品や補薬への関心の高まりによるものであろう。様々な「現代病」が表面化するなかで、高麗人蔘成分を含むドリンク剤やカプセルなどの販売戦略が効果的に行われてきたことも、その表裏をなす事実であったと考えられる。

本稿はまず、高麗人蔘の日本の国内市場が東アジアの国際市場において占める位置を確かめることから課題に接近していきたいが、そのためにもまず日本における高麗人蔘の輸出入の近況

を把握していくことにする。

近年の日本における高麗人蔘の需給については、国内生産の停滞と輸出量の減少傾向のなかで輸入量が激増し、差し引きでみた国内供給量も急増傾向にあるが、この場合、そうした概括では容易に「輸出」は国内生産品に限定され、「輸入」は全量が国内市場で消費されるという

表1 高麗人蔘の国内市場における国内向国産品出荷量と輸入品の対比

年次	国内向国産品 出荷量 (A)	輸入品* (B)	国内市場への 供給量 (A) + (B)
1980年	41 ^ト (26.3%)	115 ^ト (73.7%)	156 ^ト (100%)
1983年	54 (20.1)	214 (79.9)	268 (100)
1985年	44 (10.0)	396 (90.0)	440 (100)
1986年	43 (7.9)	504 (92.1)	547 (100)
1987年	53 (7.7)	632 (92.3)	685 (100)
1988年	57 (6.8)	782 (93.2)	839 (100)
1989年	62 (6.3)	927 (93.7)	989 (100)

*当該年の輸入量より表7の「輸入品の再輸出货量」を差し引いた量、その年の国内市場に供給された輸入品の量と仮定した
資料：『薬用人蔘に関する資料』（日本人蔘販売農業協同組合連合会〔日蔘連〕、平成3年3月）より算出。

表2 高麗人蔘輸出货量の推移（単位：トン、百万円）

年次	紅 蔘		白 蔘		その他のもの		計	
	数 量	金 額	数 量	金 額	数 量	金 額	数 量	金 額
1980年	131.0	4,020	10.0	189.9	0.5	7.0	142	4,217
1981年	142.9	3,724	11.6	172.3	5.8	57.2	160	3,954
1982年	135.6	3,356	7.6	128.4	14.3	122.6	157	3,607
1983年	142.6	4,019	10.2	201.6	11.6	130.6	164	4,351
1984年	130.6	4,065	6.9	144.4	3.7	43.5	141	4,253
1985年	115.4	3,194	11.4	244.3	9.5	135.5	136	3,574
1986年	121.6	2,419	15.1	179.4	12.4	124.1	149	2,722
1987年	98.6	1,958	10.4	166.1	5.1	39.8	114	2,164
1988年	82.1	1,451	9.6	103.6	4.2	16.9	96	1,571
1989年	87.7	1,374	8.5	85.3	0.2	1.9	96	1,461
1990年	64.8	1,049	8.3	97.4	2.8	37.5	76	1,184

資料：『薬用人蔘に関する資料』より作成。

(5) 第2次製品は添加された水分や糖分などを含んだ重量であるから、第1次製品の量と単純に対応させることはできない。
(6) 病院・一般診療所・歯科診療所の推定患者数は1980年の8,015万人から1987年の8,069万人へと、ほとんど変化がなかった。『厚生統計要覧』平成2年版。

錯覚が生じ得ることにまず注意しておかなければならない。日本からの輸出量には国内産高麗人蔘のみでなく、輸入品の再輸出や、輸入品を国内で加工したものの輸出が含まれていることを念頭におかなければならないのである。

ここではまず高麗人蔘の輸出入の動向を巨視的に把握することを通して、国内の高麗人蔘産業と高麗人蔘の輸出入がどのように関連づけられているかを明らかにしておきたい。

近年の日本の高麗人蔘の輸出入量の推移は、次の表2と表3にみる通りである。1980年代半ばからの輸出の減退と輸入の激増を容易にみてとることができるが、注目されるのは輸出においては紅蔘が一貫して圧倒的部分を占め続けているのに対して、輸入においては紅蔘と白蔘がともに近年輸入量の激増をみせているということである。すなわち、輸出に占める紅蔘の比率は1980年に数量で92.3%、価格で95.3%であったが、1990年にもそれは数量で85.3%、価格で88.6%と、比率を若干低下させながらも圧倒的部分を占め続けてきたし、輸入においては、1980年に数量で紅蔘が29.3%、白蔘が66.4%、価格で紅蔘が27.0%、白蔘が67.8

%を占めていたのが、1990年には数量で紅蔘が45.5%、白蔘51.7%、価格で紅蔘が27.4%、白蔘が71.2%という比率になっている。

同時に注目しておくべきなのは、紅蔘も白蔘も、輸出価格・輸入価格・国産品出荷価格（輸向・国内向）がそれぞれ大きな乖離を示しているという事実である。紅蔘の場合、表4に明らかかなように、市場別価格はそのすべてが低落しているなかで、価格の順位は近年ほぼ一貫して輸出価格・輸向国産品出荷価格・国内向国

表4 紅蔘の市場別価格の乖離 (単位: 円/キログラム)

年次	輸出価格	輸入価格	国産品出荷価格	
			輸向	国内向
1980年	30,687	10,886	27,676	12,465
1981年	26,060	9,157		
1982年	24,749	12,367		
1983年	28,184	9,157		
1984年	31,126	12,367		
1985年	27,678	13,177	24,234	12,467
1986年	19,893	8,470	21,075	10,007
1987年	19,858	6,719	16,755	10,771
1988年	17,674	5,237	14,539	9,000
1989年	15,667	4,485	15,129	8,703
1990年	16,118	2,664		

資料：輸出価格は表2より、輸入価格は表3より算出。
国産品出荷価格は『薬用人蔘に関する資料』より。

表3 高麗人蔘輸入量の推移 (単位: トン、百万円)

年次	紅蔘		白蔘		その他のもの		計	
	数量	金額	数量	金額	数量	金額	数量	金額
1980年	43.0	468.1	97.6	1,211.3	5.8	57.0	147	1,736
1983年	74.6	683.1	159.3	1,963.0	4.1	38.1	238	2,684
1984年	188.9	2,336.2	295.4	3,893.3	30.6	334.2	515	6,564
1985年	158.9	2,088.6	203.1	2,581.6	59.1	697.1	421	5,367
1986年	183.6	1,555.1	326.3	3,007.5	37.5	265.1	547	4,828
1987年	204.4	1,373.4	375.6	3,192.1	76.5	459.8	657	5,025
1988年	376.9	1,973.9	388.3	2,984.4	29.9	154.3	795	5,113
1989年	359.1	1,610.4	563.1	4,042.4	28.1	106.0	950	5,759
1990年	519.9	1,385.2	590.4	3,613.3	32.8	76.0	1,143	5,075

資料：『薬用人蔘に関する資料』

産品出荷価格・輸入価格の順となっており（ここに表示された年に関しては、1985年のみは輸入価格が国内向国産品出荷価格をうわまわり、1986年にもみ輸出向国産品出荷価格が輸出価格をうわまわっている）、輸出価格を100としたときのそれぞれの指数は、1980年の場合、輸出向国産品出荷価格90.2、国内向国産品出荷価格40.6、輸入価格35.5であったが、1988年にはそれが輸出向国産品価格82.3、国内向国産品価格50.9、輸入価格29.6へと変化している。輸出価格と輸出向国産品価格の乖離の理由としては、出荷時点から輸出時点までの流通過程においてつけ加えられたマージンと、高品質輸入品の再輸出による国産品との格差の2つの要因がさしあたり考えられるが、紅蔘輸出量が大きく減少しているなかでこの乖離が拡大傾向にあることは、第1の要因よりも第2の要因がより強く作用するようになってきていることを窺わせるといえよう。

白蔘の場合、1985年と1986年以外には国内での生産がほとんどなく、しかもその両年も国内生産のほとんどすべてが国内向に出荷されていたにもかかわらず⁽⁷⁾年間7トンから15トンを出し続けているわけであるが、表3でみた近年の白蔘輸入量の激増からみて、日本から輸出される白蔘はほぼその全量が輸入白蔘の再輸出ないし、若干の加工過程を経た事実上の輸入白蔘であると考えられる。したがって白蔘の輸出価格と輸入価格の差は白蔘の国際市場と接触することによって得られる流通マージン、または日本を経由することによるブランド化にともなう付加価値を意味するであろう。この場合、輸入量と輸出量を対比すれば後者は極めて僅少の量にすぎないから（輸入量に対する輸出量の比率は1980年10.2%、1985年5.6%、1990年1.4%）、輸入白蔘の大部分は国内市場に供

表5 白蔘の市場別価格の乖離（単位：円/キログラム）

年次	輸出価格	輸入価格	国産品出荷価格	
			輸出向	国内向
1980年	18,990	12,411		23,000
1981年	14,853			
1982年	16,894			
1983年	19,764	12,323		25,400
1984年	20,928	13,180		
1985年	21,430	12,711	15,800	15,000
1986年	11,881	9,217	10,400	10,000
1987年	15,971	8,499		9,400
1988年	10,792	7,686		
1989年	10,035	7,189		13,300
1990年	11,735	6,120		

資料：輸出価格は表2より、輸入価格は表3より算出。国産品出荷価格は『薬用人蔘に関する資料』より。

給され、一部分は再加工された後に輸出市場にむかっていると考えられる。この場合、表5にみるように、白蔘の輸入価格と国内向国産品出荷価格との間に大きな差があることは、国内の白蔘製造業にとっての困難な条件を意味すると同時に、白蔘輸入業者に大きな利益が保障されていることを意味するであろう。この点は紅蔘の場合も同様であり、これは、近年「高麗人蔘輸入国」の位置を決定的にしてきた日本の国内での高麗人蔘産業が、国際競争のなかでいかに厳しい状況に置かれているかを、端的に物語る事実であると言える。

このことを紅蔘の輸出向国産品出荷量と輸出量との対比を通して、さらに具体的に検討していくことにしよう。表6における「輸出に占める国産品比率」は、当年の輸出向国産品出荷量のすべてが同年中に輸出されたと仮定して計算したものであるが、傾向的にこの比率が低下しつつあることが明らかである。つまり、かつて「高麗人蔘輸出国」であった日本は、近年の紅蔘輸出の不振のなかで、その輸出紅蔘すら輸入

(7)前掲拙稿「日本における高麗人蔘のマーケティングに関する基礎的研究(1)」参照。

品に依存する度合いをますますたかめているわけである。

その一方で国内市場もまた、近年は安価な輸入品が氾濫していることは、既にたびたび指摘してきたところである。ここでこころみに高麗人蔘の輸出市場および国内市場における輸入品と国産品の占める比率を試算してみたのが、表7および前掲の表1である。

ここではまず、輸出量の1.1倍(1980年)→3.2倍(1985年)→10.3倍(1989年)と、急速に膨張している国内市場の動向からみてみよう。表1にみるように、国内市場への高麗人蔘供給量が1980年から1989年にかけて6.3倍

表6 紅蔘の輸出入国産品出荷量と輸出量の対比

年次	輸出量(A) (トン)	輸出入国産品 出荷量(B) (トン)	輸出に占める 国産品比率 (B)/(A)(%)
1980年	131.0	102.0	78.0
1983年	142.6	134.2	94.1
1985年	115.4	84.8	73.5
1986年	121.6	66.9	55.0
1987年	98.6	60.2	61.1
1988年	82.1	58.4	71.1
1989年	87.7	52.9	60.3

資料：表2および『薬用人蔘に関する資料』より算出。

表7 高麗人蔘の輸出市場における輸出入
出荷量と輸入品再輸出量の対比
(紅蔘・白蔘・雑製品の合計)

年次	輸出量(A) (トン)	輸出入国産品 出荷量(B) (トン)	輸入品の再輸出力 (A)-(B)* (トン)
1980年	142 (100)	110 (77.5)	32 (22.5)
1983年	164 (100)	140 (85.4)	24 (14.6)
1985年	136 (100)	111 (81.6)	25 (18.4)
1986年	149 (100)	106 (71.1)	43 (28.9)
1987年	114 (100)	89 (78.1)	25 (21.9)
1988年	96 (100)	83 (86.5)	13 (13.5)
1989年	96 (100)	73 (76.0)	23 (24.0)

*輸出量から輸出入国産品出荷量を差し引いた量を「輸入品の再輸出力」と仮定した。

資料：『薬用人蔘に関する資料』より算出。

の激増をみるなかで、国産品は絶対量を近年ほぼ確実に増加させながらも、その比率は急速に低下しており、最近に至っては極端に言えばほとんどネグリジブルな存在にすぎなくなっていると言える。このような結果をもたらした最も直接的な要因としては、紅蔘の例を示した表4でみたような、国内向国産品出荷価格より輸入価格がはるかに安価であるという事実が指摘できるであろう。

しかし他面では、表1に明らかな高麗人蔘の国内市場の急速な膨張と、そのなかで国内向出荷も絶対量としては一応増加趨勢を保っているという事実は、国産品の生産性向上と、輸入品に対抗し得る高品質人蔘の供給によっては、国産高麗人蔘の国内市場拡大の可能性がなくはないということも示している。それを可能にいくために最も肝心なことは、土根生産における生産費のより一層の圧縮は限界に達していると考えられるから、付加価値の高い新たな製品開発と「国産品=高品質製品」というブランド化を可能にするマーケティング戦略であろうと考えられる。

次に、表7にもどって輸出市場の動向をみてみよう。表6と表7を対比すると、表6の紅蔘のみについてみた場合には、輸出入国産品出荷の絶対量の減少とともに輸出に占める国産品の比率もほぼ明瞭な低下趨勢にあったのに対して、高麗人蔘の第1次製品を合計した表7の場合には、輸出入国産品出荷の絶対量が減少しているなかで輸出品全体に占める国産品はほぼ一定の比率を保っていることが注目される。このことをもたらした要因は、もちろん輸出品全体の減少が最も直接的なそれであることは言うまでもないが、副次的には、この間「生干し」「湯通し」「その他」の雑製品の輸出入出荷がほぼ横ばいしないし増加傾向をみせてきたことである⁽⁸⁾。

(8)この傾向を生むもとになっている福島県と長野県にみられる近年の動向については別稿で論じる予定である。

これもまた輸入品の氾濫のなかでの日本の高麗人蔘産業の「生き残りへの途」のひとつを示唆していることを確認できるであろう。

以上、「輸出」「輸入」の相手国を問題にしないでその総量と国内生産量との関係を分析してきたが、高麗人蔘の国際市場における日本の高麗人蔘業の位置をより正確に把握するためには、国際市場そのもののあり方をより立体的に明らかにしなければならない。さしあたり「輸出」「輸入」の相手国をたしかめることから、その課題に接近していくことにしよう。

近年の日本からの高麗人蔘の輸出国は、紅蔘については香港がほぼ全量近くを占め続けており、白蔘は1989年に台湾向輸出が再開されるまでは香港の次をシンガポールが占め、「おたね人蔘」の名で総称されるその他の雑製品は、年によって変動がはげしいが、1990年現在、香港、シンガポールの順である。それらの具体的な数量・価格は次の表8～11の通りである。

ここで注目されるのは、高麗人蔘輸出の圧倒的部分を占める紅蔘の場合は、表8にみるように、輸出相手国による単価の相違はそれほど顕著ではない⁽⁹⁾のに対して、白蔘の場合には、表9にみるように、1987年を例外として、香港向と他地域向の価格に大きな差があることである⁽¹⁰⁾。前節でみたように日本からの輸出白蔘はその大部分が輸入品の再輸出であることから考えて、国際市場に出廻る白蔘にはおそらく第2次製品のための加工原料としての白蔘と、それ自体完成品としての白蔘が、それぞれ独自の流通ルート形成しているのではないかと考えられる。その点は、さきにみたように日本への紅蔘の輸入価格と日本からの輸出価格のはなはだしい乖離から判断して、紅蔘にも言えることであろう。つまり高品質紅蔘・低品質紅蔘・高品質白蔘・

低品質白蔘の4種は、もちろん相互に流動的で影響も与えあいながら、基本的には別個の流通ルートを持っているのではないかと考えられるのである。しかし、この点は、1988年以降の台湾向輸出の急増までは日本からの高麗人蔘輸出の大部分を占めてきた香港とシンガポールが、最終消費地ではなく、いずれも中継貿易に大きな比重を置くシティ・ステートで、その大部分が再輸出に向けられているとみられることを考えても、高麗人蔘の国際的流通をより具体的に把握したうえで、結論づけられなくてはならないであろう。

まず、近年の日本の高麗人蔘の輸入相手国についてみてみよう。総数量でみると近年ますます中国の比重が高まっており、1980年代半ば頃までは中国とほぼ同量を日本に輸出していた韓国を大きく引き離すに至っている。しかし、白蔘中心の韓国と紅蔘中心の中国を比較すると、少なくとも日本の国産品市場での常識とは反対に、前者の単価が後者のそれを大きく上回っているが、紅蔘中心に一定量の日本向輸出を維持している北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)が最も高い単価を示している。その具体的な数量と価格は次の表12～15の通りであるが、たとえばさきの表8と表12を比較してみると、高単価の紅蔘のほとんど全量を輸出している香港から、それとは比較にならないほど低単価の紅蔘の一定量を輸入していることが注目される。おそらくそれは中国蔘が香港経由で輸入されたものと考えられるが、さきに想定した高品質紅蔘と低品質紅蔘の独自の流通ルートの存在を、こうした形でたしかめることができるのである。白蔘については、韓国・中国からの低単価(但し中国・香港からの輸入紅蔘よりは高単価)品輸入と、日本から香港への高単価品輸出、

(9)「その他」地域への1988年と1990年の輸出単価は例外であるが、輸出数量が極めて少量であることもあり、何らかの偶然的要素によるものと考えられる。

(10)「おたね人蔘」の価格差はいっそう顕著であるが、これは製品そのものが多種多様であることによると考えられる。

表 8 紅蔘の国別輸出

	1986年			1987年			1988年			1989年			1990年			
	数量	価格	単価	数量	価格	単価	数量	価格	単価	数量	価格	単価	数量	価格	単価	
	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg	
台湾	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
香港	121,595	2,418,582	19,890	98,503	1,955,894	19,855	81,924	1,448,700	17,683	87,321	1,367,329	15,587	64,515	1,047,579	16,238	
シンガポール	—	—	—	30	604	20,133	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
インド	—	—	—	100	1,669	16,690	100	1,372	13,720	100	1,411	14,110	—	—	—	—
その他	—	—	—	—	—	—	50	442	8,840	300	5,000	16,667	300	925	3,083	
計	121,595	2,418,582	19,890	98,637	1,958,167	19,852	82,074	1,450,514	17,673	87,721	1,373,740	15,660	64,815	1,048,504	16,117	

資料：『薬用人蔘に関する資料』（出典「貿易月報」）。但し1989年の単価の「その他」と「計」の欄のあやまりを修正した。

表 9 白蔘の国別輸出

	1986年			1987年			1988年			1989年			1990年			
	数量	価格	単価	数量	価格	単価	数量	価格	単価	数量	価格	単価	数量	価格	単価	
	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg	
香港	9,126	139,124	15,245	9,162	156,959	16,195	8,682	96,819	11,152	5,135	63,380	12,343	6,185	84,161	13,637	
シンガポール	2,270	19,432	8,560	360	5,405	15,014	900	6,796	7,484	480	3,154	6,571	—	—	—	
台湾	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
インド	—	—	—	139	1,111	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
その他	3,231	18,111	5,605	216	2,603	12,051	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	15,127	179,420	11,861	10,407	166,078	15,958	9,582	103,555	10,870	8,495	85,277	10,038	8,285	97,435	11,760	

資料：『薬用人蔘に関する資料』

表 10 「おたね人蔘」(その他のもの)の国別輸出

	1986年			1987年			1988年			1989年			1990年		
	数量	価格	単価	数量	価格	単価	数量	価格	単価	数量	価格	単価	数量	価格	単価
台湾	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg
香港	—	—	—	1,606	15,396	9,587	2,177	3,038	1,395	—	—	—	—	—	—
シンガポール	7,158	81,334	11,363	300	1,920	6,400	1,253	9,793	7,816	—	—	—	2,176	34,969	16,070
インドネシア	4,680	38,670	8,263	2,118	15,114	7,136	555	3,528	6,357	24	465	19,375	600	2,578	4,297
その他	504	3,676	7,294	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	36	416	416	1,042	7,351	7,055	250	548	2,192	170	1,395	8,206	—	—	—
計	12,378	124,096	123,096	5,066	39,781	7,853	4,235	16,907	3,992	194	1,860	9,588	2,776	37,547	13,528

資料：『薬用人蔘に関する資料』。ただし1988年のシンガポールへの輸出数量、1990年の輸出価格の計および単価の平均についての誤りを修正した。

表 11 高麗人蔘製品の国別輸出 (表 8 ~ 10 の合計)

	1986年			1987年			1988年			1989年			1990年		
	数量	価格	単価	数量	価格	単価	数量	価格	単価	数量	価格	単価	数量	価格	単価
台湾	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg
香港	500	2,753	5,506	1,606	15,396	9,587	2,177	3,038	1,395	2,160	15,785	7,308	2,100	13,274	6,321
シンガポール	137,879	2,639,040	19,140	108,499	2,114,773	19,491	91,859	1,555,312	16,932	92,456	1,430,709	15,474	72,876	1,116,709	16,010
インドネシア	6,950	58,102	8,360	2,508	21,123	8,422	1,455	10,264	7,054	504	3,777	7,494	600	2,578	4,297
その他	504	3,676	7,294	239	2,780	11,632	100	1,372	13,720	100	1,411	14,110	—	—	—
計	3,267	18,527	5,671	1,258	9,954	7,913	300	990	3,300	1,190	9,353	7,860	300	925	3,083
計	149,100	2,722,098	18,257	114,110	2,164,026	18,964	95,891	1,570,976	16,383	96,410	1,460,877	15,153	75,876	1,183,486	15,588

資料：『薬用人蔘に関する資料』

表 12 紅蔘の国別輸入

	1986年			1987年			1988年			1989年			1990年		
	数量	価格	単価	数量	価格	単価	数量	価格	単価	数量	価格	単価	数量	価格	単価
	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg
韓国	—	—	—	2,000	16,428	8,214	40	300	7,500	—	—	—	51	4,837	94,843
北朝鮮	1,462	27,229	18,672	6,002	99,612	16,596	1,658	18,498	11,157	—	—	—	1,678	21,034	12,535
中国	180,721	1,517,343	8,396	196,094	1,256,263	6,406	372,240	1,938,949	5,209	353,948	1,573,953	4,447	517,675	1,358,038	2,623
香港	1,402	10,460	7,462	308	1,133	3,679	2,983	16,149	5,414	2,693	8,819	3,275	508	1,272	2,504
計	183,585	1,555,104	8,471	204,404	1,373,436	6,719	376,921	1,973,896	5,237	369,136	1,610,392	4,484	519,912	1,385,181	2,664

資料：『薬用人蔘に関する資料』

表 13 白蔘の国別輸入

	1986年			1987年			1988年			1989年			1990年		
	数量	価格	単価	数量	価格	単価	数量	価格	単価	数量	価格	単価	数量	価格	単価
	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg
韓国	266,922	2,461,144	9,220	283,897	2,503,449	8,818	254,494	2,076,157	8,158	246,724	2,166,970	8,783	183,192	1,511,983	8,254
中国	53,677	484,018	9,017	91,723	688,438	7,506	132,810	908,238	6,788	315,868	1,872,318	5,928	402,632	2,183,717	5,162
北朝鮮	11	1,552	141,097	17	249	14,647	—	—	—	—	—	—	—	—	—
アメリカ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
その他	5,675	60,791	10,712	—	—	—	—	—	—	2,693	8,819	3,275	3,600	17,599	4,889
計	326,285	3,007,505	9,217	375,637	3,192,136	8,498	388,304	2,984,336	7,686	563,083	4,042,350	7,179	590,424	3,613,299	6,120

資料：『薬用人蔘に関する資料』

表 14 「おたね人蔘」(その他のもの)の国別輸入

	1986年			1987年			1988年			1989年			1990年		
	数量	価格	単価	数量	価格	単価	数量	価格	単価	数量	価格	単価	数量	価格	単価
韓	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg
中	423	4,222	9,981	3,524	22,095	6,270	1,110	28,887	26,024	—	—	—	—	—	—
香	37,089	260,645	7,028	72,988	457,656	5,998	28,450	123,318	4,335	28,065	106,016	3,773	32,480	73,978	2,278
そ	—	—	—	—	—	—	300	2,046	6,820	—	—	—	—	—	—
の	10	213	21,300	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	37,522	265,080	7,065	76,492	459,751	6,010	29,860	154,251	5,166	28,065	106,016	3,773	32,800	76,012	2,317

資料：『薬用人蔘に関する資料』

表 15 高麗人蔘製品の国別輸入(表12～14の合計)

	1986年			1987年			1988年			1989年			1990年		
	数量	価格	単価	数量	価格	単価	数量	価格	単価	数量	価格	単価	数量	価格	単価
韓	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg
北	267,345	2,465,366	9,222	289,421	2,541,972	8,783	255,644	2,105,344	8,235	246,724	2,166,970	8,783	183,243	1,516,820	8,278
中	1,473	28,851	19,587	6,019	99,861	16,591	1,658	18,498	11,157	2,495	27,620	11,070	1,678	21,034	12,535
香	271,487	2,262,006	8,332	360,785	2,382,357	6,603	534,500	2,970,505	5,558	697,911	3,552,287	5,090	953,787	3,515,733	3,686
そ	7,077	71,253	10,068	308	1,133	3,679	3,823	18,195	5,542	3,184	11,881	3,731	728	2,061	2,831
の	10	213	21,300	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	547,392	4,827,689	8,819	656,533	5,025,323	795,085	795,085	5,112,542	6,430	950,314	5,758,758	6,060	143,136	5,074,492	4,459

資料：『薬用人蔘に関する資料』

台湾への低単価品輸出が対応している。日本産の白蔘輸出は前述のようにほぼネグリジブルであるから、香港への輸出白蔘は韓国・中国産の白蔘に日本で何らかの手を加えられたものと考えられる。これらの点について、製品別にもっと具体的に検討してみよう。

高麗人蔘全体の輸入総量で1986年まではトップを占め、それ以後も中国に次いで2位を占めている韓国は、意外にも国際市場での主要商品である紅蔘については日本への輸出実績でほとんど大きな意味を持たず、紅蔘の日本への輸入は安価な中国産が圧倒的部分を占めている。これはもちろん、後にみるような、韓国から日本への紅蔘が第2次製品に加工されて大量に輸入されているという事実と関連している。中国産の場合、白蔘より紅蔘のほうが安価であり、低品質の紅蔘が大量に輸入されていることによるものであると考えられる。量は必ずしも多くはないが、北朝鮮産の高価格紅蔘が中国産と対照をなしていることがここでは注目される⁽¹¹⁾。中国産および香港経由の輸入紅蔘の価格が急落している大きな理由のひとつは外国為替相場の変動の影響を受けたためであることは疑いないが、より基本的に輸入数量の急増（中国からの輸入量は1986～1990年に2.86倍になった）にあらわれているような、低品質の粗製品の大量流入の傾向をものがたるものであろう。その大部分は日本でエキスまたは粉末、カプセルなどに加工して商品化されており、商品として完成した形で輸入される北朝鮮産紅蔘および韓国産紅蔘との性格の違いが指摘されなければならない。

また、主として日本でかなりの部分が医薬品

として用いられている輸入白蔘の場合、数量では1988年まで韓国がトップを占めて中国が2位にあったが、翌年から中国からの輸入がトップになって韓国との順位が逆転している。さきにも触れたように中国の輸入紅蔘より高価な輸入白蔘であるが、韓国産との価格差は近年特に顕著にひらいている⁽¹²⁾。このことから考えて、日本で医薬品に再加工されるのは主として中国産の白蔘ではないかと考えられる。

高麗人蔘の雑製品（おたね人蔘）の輸入先は中国が圧倒的部分を占めているが、輸入単価は「半製品」としての中国産輸入紅蔘をさらに下廻っており、輸入量も、1990年の場合、高麗人蔘製品の数量で2.9%、価額で1.5%を占めるに過ぎないから、国際市場におけるその地位はほとんど無視し得る程度であるとみてもよいであろう。

以上のほか高麗人蔘製品の輸入については、直接消費者に渡される完成した商品のうち、砂糖を加えて飲料用に用いられる「調整品」と、無糖で薬品性のより高い飲料用に用いられる「調製品」、小売用に包装された、「おたね人蔘」を含む「製剤」などがあるが、これら高麗人蔘の第2次製品の数量および価額は表16にみる通りである。ここでは、近年韓国からの輸入がかなり顕著に増加しており、1990年の場合、それらの輸入価額の合計が表15でみたこれらを含まない高麗人蔘製品の輸入合計額の27.3%にあたるまで達しているところからみて、高麗人蔘の国際市場において軽視できない位置を占めるに至っている。韓国からのこれら完成品の形での輸入価額は、同年、韓国からの紅蔘輸入価額の4.13倍、白蔘輸入価額の1.32

(11)北朝鮮産の高麗人蔘製品の品質および為替レートからみて、この高価格は不自然な印象を与えるが、その点の分析は今後の課題としたい。1990年の韓国産の輸入紅蔘の高価なことが注目されるが、輸入数量そのものがほとんどネグリジブルであり、何らかの偶然的理由によるものであると考えられる。

(12)1986年以後のウォンの対ドル為替レート上昇の要因も加わっていると考えられる。

表 16 高麗人蔘の「調整品」「調製品」「製剤」の輸入*

	1986年			1987年			1988年			1989年			1990年		
	数量	価格	単価	数量	価格	単価	数量	価格	単価	数量	価格	単価	数量	価格	単価
韓国	A	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg	kg	千円	円/kg	kg	千円
	B	96	483	4,823	45	1,111	24,689	539	1,701	3,150	4,614	2,216	480	25	203
	C	74,824	582,560	7,780	94,358	684,944	7,259	101,569	6,516	604,131	9,137	615,905	615,905	80,685	7,633
中国	A	127,756	1,482,638	11,605	82,027	785,289	9,574	162,226	1,177,462	7,258	141,029	1,027,366	7,285	199,802	1,381,558
	B	725	1,311	1,808	7,136	2,396	336	—	—	—	—	—	—	845	990
	C	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
その他	A	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	B	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	C	1,441	4,246	2,947	814	3,224	3,960	2,500	2,373	949	3,250	5,281	1,625	670	699
計	A	821	1,774	2,161	7,181	3,507	488	1,287	2,088	1,622	7,864	7,497	953	1,540	1,892
	B	76,315	586,796	7,689	95,172	652,168	6,853	104,069	664,232	6,383	66,320	604,529	9,115	83,027	625,559
	C	127,756	1,482,638	11,605	82,027	785,289	9,574	162,226	1,177,462	7,258	141,029	1,027,366	7,285	200,594	1,384,987

*Aは「飲料として用いるもの」、Bは「飲料料を加えたもの」、Cは「砂糖を加えたもの」のうち砂糖を加えたもの、Bは「飲料料として用いるもの」のうち無糖のもの、Cは小売用に包装された「おたね人蔘を含む製剤」である。
資料：『薬用人蔘に関する資料』

表 17 韓国の高麗人蔘輸出 (単位：キログラム、ドル)

	台湾		香港		日本		シンガポール		計(その他を含む)	
	数量	金額	数量	金額	数量	金額	数量	金額	数量	金額
1985年	75,264	10,985,127	54,481	9,021,442	295,382	26,238,245	2,065	138,494	510,602	53,548,656
1986年	63,016	8,755,020	90,166	17,905,680	445,584	28,486,000	28,451	6,142,196	735,235	69,040,910
1987年	54,303	6,379,615	131,686	20,048,271	344,547	31,157,741	59,388	13,049,483	709,313	79,484,596
1988年	61,560	8,736,751	130,792	21,574,780	349,059	33,624,196	68,078	16,450,326	694,179	88,519,176
1989年	36,036	4,814,748	197,394	34,348,531	306,735	33,067,049	68,214	19,473,005	688,599	100,080,048
1990年	24,144	1,345,417	204,979	46,285,852	302,913	31,901,950	37,180	10,558,355	670,449	98,983,029

資料：『薬用人蔘に関する資料』

表 18 香港の高麗人蔘輸入 (単位：キログラム、香港ドル)

	中 国		韓 国		日 本		アメリカ		計 (その他を含む)	
	数 量	金 額	数 量	金 額	数 量	金 額	数 量	金 額	数 量	金 額
1985年	442,088	176,888,909	44,920	58,913,359	145,351	132,669,656	419,914	314,397,681	1,152,176	795,739,998
1986年	630,222	249,442,999	113,024	154,252,524	180,309	189,143,833	469,267	307,378,008	1,509,378	1,025,139,175
1987年	749,957	260,211,999	156,404	208,078,235	170,181	222,585,109	685,642	428,634,827	1,972,467	1,360,076,613
1988年	892,462	275,747,734	144,063	189,685,524	152,803	201,501,064	438,050	415,707,879	1,922,046	1,366,562,631
1989年	1,559,470	331,664,458	202,620	252,926,896	139,414	183,642,924	595,824	508,993,413	2,755,254	1,544,798,424
1990年 (1~9月)	1,367,587	181,420,954	158,567	175,238,191	97,443	120,191,530	384,241	303,489,354	2,201,295	934,442,265

資料：『薬用人蔘に関する資料』

表 19 香港の高麗人蔘輸出 (単位：キログラム、香港ドル)

	台 湾		中 国		日 本		シンガポール		計 (その他を含む)	
	数 量	金 額	数 量	金 額	数 量	金 額	数 量	金 額	数 量	金 額
1985年	50,343	42,481,055	166,976	113,562,700	120,601	46,127,497	68,396	77,448,370	472,521	351,525,015
1986年	43,722	29,857,098	133,839	87,785,605	114,960	43,116,370	105,923	73,443,420	469,648	303,962,928
1987年	205,759	72,523,916	144,754	81,600,566	186,037	59,237,748	86,959	70,115,155	746,803	370,544,686
1988年	745,309	202,598,106	173,846	90,380,157	223,324	74,395,135	62,149	54,479,804	1,329,340	500,381,824
1989年	855,535	199,483,474	289,631	125,805,935	341,591	98,467,981	70,392	61,295,733	1,713,970	575,139,262
1990年 (1~9月)	765,288	144,467,085	314,510	94,727,828	384,193	65,729,303	98,232	86,100,049	1,702,203	454,172,218

資料：『薬用人蔘に関する資料』

倍に達しているのである⁽¹³⁾。“高麗人蔘先進国”の中核を占め、東アジアの高麗人蔘市場においてもとくに高品質製品の供給量において他を圧倒していると思われる韓国から日本への紅蔘輸出が意外に少なく、白蔘が主として日本に輸出されているという事実は、この完成品輸出における韓国の圧倒的地位と関連して理解されなければならない。すなわち、韓国は高品質の完成された商品を直接日本に供給しつつ、他方で医薬品用の白蔘を大量に日本に輸出しているのであり、韓国の高麗人蔘産業の他国に類のない底の深さを、こうしたかたちで示していると言うことができる。

韓国からの高麗人蔘輸出と香港の高麗人蔘輸出入について、日本の日蔘連によって集計された数字を示しておけば表 17～19 の通りである。日本の紅蔘の最大の輸出先である香港が、高麗人蔘についても中継貿易地であることが、表 18 と表 19 と対照することによって明らかであろう。ともあれ、東アジアの高麗人蔘市場で決定的位置を占めるのは、低品質・低価格の中国と、高品質・高価格の韓国であることは疑いない。したがって、次に韓国からの高麗人蔘の輸出状況について、より具体的に明らかにしていくことが課題になる。

3. 韓国における高麗人蔘の輸出入近況

韓国が“高麗人蔘先進国”として古代・中世・近代を通して東アジアにおける高麗人蔘輸出国でありつづけてきたことは周知の通りである。近年の韓国の高麗人蔘輸出相手国についてみると、1970 年代には主に東アジアを中心に、日本をはじめとする 18 ケ国にすぎなかったが、90

年代初めの現在では 70 余国に輸出地域が拡大するなど、地域的にも大きな変化を遂げている。これは、高麗人蔘事業を国家的次元で支援するようになったことによって科学的な人蔘の効能の究明と製品の開発がすすんだこととともに、1974 年から国際人蔘シンポジウムが韓国で開催されて、国内の科学者はもちろん、世界的な学者たちが参加して討議することになり、これが国内外の記者たちによって伝えられて、海外の消費者や取引業者たちの関心をひくことになったこともひとつの直接的要因になったものと思われる。

世界の高麗人蔘生産規模について各国別に具体的な資料を収集することは今日でもなお困難で、正確に把握するのは難しいが、高麗人蔘市場の取引規模から総合的に類推してこれを推定してみれば、土根生産量は 1982 年の 15,059 トンから 1987 年の 31,166 トンへと約 2 倍に増大した。これは日本を除く主要な高麗人蔘生産国の生産規模が拡大したためである。韓国の場合も、1982 年を基準にして 1987 年には 91.4 % 増の 14,424 トンを生産したが、世界全体の生産量に占める比率は、同じ期間に 50.0 % から 46.3 % にむしろ減少している。その反面で中国はその比率を 35.6 % から 43.0 % に増やし、量的には韓国と似た水準の土根生産量を示している。しかし、日本は生産量も比率も減少して、1987 年の生産量は 534 トン、構成比は 1.7 % にすぎない。

一方、高麗人蔘の需要動向が全般的に引き続き増加していることは、さきにみた最近の日本の例からも間違いがないと考えられる。しかし、国際市場における価格の動向などから推論されるように、依然として人蔘の生産規模にくらべてその需要が絶対的に不足しているのが実情で

(13)この他に、日韓を行き来する旅行者などによって日本に持ち込まれる「高麗人蔘茶」「高麗人蔘エキス」「高麗人蔘酒」などの完成品は膨大な量に達していることは確実であるが、統計的に把握する方法がないため、ここでは分析の対象から排除せざるを得ない。

あろう。しかし、今後、人蔘の主要な生産輸出国の努力いかんによってはその需要も急激に膨張させることができるように思われる。高麗人蔘の需要のなかで東洋蔘が人蔘全体の77%以上を占めているが、1981年に13%程度にすぎなかった西洋蔘⁽¹⁴⁾が23%を占めるようになり、西洋蔘が大きく増加していることも、すなわち東南アジア市場への西洋蔘の流入のみならず、欧米諸国での人蔘市場が急速な拡大傾向にあることも、こうした予測を可能にするひとつの要因である。

ここでとりあえず西洋蔘を除いた1988年の世界の高麗人蔘市場における市場占有率をみれば、乾蔘を基準にして中国71.3%、韓国23.7%、日本4.1%、北朝鮮0.9%、の順である。

表20は、韓国における1980年から1990年までの高麗人蔘輸出の現況を年度別にみたものである。韓国においては紅蔘類は韓国タバコ人蔘公社による専売制度がとられており、民間では白蔘類を取り扱っているが⁽¹⁵⁾、専売部門(紅蔘類)の場合、1981年には前年比べて25.4%が減少したが、その後、徐々に増加しはじめ、1985年に台湾市場の輸入減少が原因で一時的に減少傾向をみせたのを除いては毎年ひきつづき伸びを示している。民間部門(白蔘類)においても似たような傾向にある。すなわち、1982年に若干の減少をみせた後回復し、その後は毎年増加を示してきたなかでとくに1989年と1990年には最も高い伸び率をあらわし、1990年には1980年の3倍以上に増加している。以上を合わせて高麗人蔘輸出の全体的推移をみると、1981年に13.3%減少した後、1982年から

(14)アメリカのウィスコンシン州とカナダ東部のオンタリオ州で栽培されており、熱を下げる効果があるといわれ、近年東南アジアにおいて消費量が急激に伸びつつある。

(15)韓国における高麗人蔘の国内流通と専売制度については、別稿で詳しく論じる予定である。

表20 韓国における年度別高麗人蔘の輸出状況 (単位：千ドル)

区分	年次										
	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年	1985年	1986年	1987年	1988年	1989年	1990年
合計	65,938 (100)	57,149 (86.7)	69,393 (105.2)	75,253 (114.1)	86,788 (131.6)	73,021 (110.7)	96,431 (146.2)	114,628 (173.8)	123,323 (187.0)	154,280 (234.0)	174,854 (265.2)
専売部門	計 (%) 35,072 (100.0)	26,152 (74.6)	39,255 (112.0)	40,746 (116.2)	41,786 (119.1)	28,841 (82.2)	44,392 (126.6)	54,564 (155.6)	62,240 (177.5)	72,796 (207.6)	79,053 (225.4)
	紅蔘 29,094	20,659	33,252	33,535	33,782	20,009	38,014	46,559	52,311	62,384	68,806
	紅蔘製品 5,978	5,493	6,003	7,211	8,004	8,832	6,378	8,005	9,929	10,412	10,247
民間部門	計 (%) 30,866 (100.0)	30,997 (100.4)	30,138 (97.6)	34,507 (111.8)	45,008 (145.8)	44,180 (143.1)	52,039 (168.6)	60,064 (194.6)	61,083 (197.9)	81,484 (264.0)	95,801 (310.4)
	白蔘 2,439	5,792	5,654	9,006	19,142	16,405	21,563	25,857	22,776	35,511	33,196
	白蔘製品 28,427	25,205	24,484	25,501	25,868	27,775	30,476	34,207	38,307	45,973	62,605

資料：韓国タバコ人蔘公社

東アジアにおける高麗人蔘の国際市場

次第に上昇し、1980年を基準にすると1990年には2.6倍以上に増加しており、そのなかで紅蔘類に比べて白蔘類の伸びが著しいことがわかる。

しかし、白蔘類の伸びが紅蔘類のそれを上回るようになったのは、1980年代に入ってから比較的新しい傾向である。すなわち表21によって1970年代からの変化をみれば、表20と原資料を異にしているため数字は完全に一致しないが、1972年に比べて1990年には全体で約11.6倍に増加しており、そのなかでも紅蔘類が15.0倍、白蔘類が9.6倍で、紅蔘類がより高い伸び率をあらわしている。輸出価額に占める比率においても、1972年には紅蔘類対白蔘類が37.3対62.7であったが、1990年には48.1対51.9と、紅蔘類の占める比率が高まってき

ている。したがって、上でみた、1980年代に白蔘類がいっそう高い伸び率をみせた事実は、こうした長期的にみた紅蔘類の伸び趨勢のなかで、韓国産高麗人蔘への評価が確立してきたことを前提とした、比較的新しい動向であることがうかがわれる。すなわち、1970年代以来の紅蔘類輸出の高い伸び率は、海外市場における韓国産紅蔘に対する好評が販売に結びついたものと考えられる。紅蔘類のなかでも紅蔘製品がさらに伸び率が著しく、同期間に紅蔘対紅蔘製品の比率も89.7対10.3から87.0対13.0へと変化している。

白蔘類の輸出においては、1972年には白蔘対白蔘製品の比率が58.7対41.3であったのが1990年には26.5対73.5へと比重が完全に逆転しているが、このことは白蔘類の場合には原

表21 年度別高麗人蔘類の輸出実績 (単位:千ドル)

区分 年次	合計	紅蔘類			白蔘類		
		小計	紅蔘	紅蔘製品	小計	白蔘	白蔘製品
1965	2,143	1,294	1,279	15	849	840	9
1970	9,928	4,158	4,102	56	5,770	5,065	705
1971	12,649	6,672	6,325	347	5,977	4,181	1,796
1972	14,164.3	5,286.5	4,739.8	546.7	8,877.9	5,210.5	3,667.4
1973	23,138.3	9,605.5	7,621.1	1,984.4	13,532.8	5,388.0	8,144.9
1974	29,364.1	10,044.7	6,770.4	3,274.3	19,319.6	5,377.0	13,942.7
1975	41,832.0	15,535.2	11,534.4	4,000.8	26,296.8	5,966.0	20,330.8
1976	53,303.3	18,696.6	16,214.5	2,482.1	34,606.7	9,515.9	25,090.9
1977	62,376.8	23,048.9	20,441.5	2,607.4	39,327.9	12,432.4	26,895.5
1978	70,199.2	24,345.6	20,855.1	3,490.4	45,853.6	18,335.1	27,518.5
1979	69,510.0	30,072.6	24,903.8	5,168.7	39,437.3	9,459.3	29,978.0
1980	65,938.0	35,072.6	29,094.5	5,978.1	30,865.4	2,438.6	28,426.8
1981	57,149.1	26,152.0	20,659.2	5,492.7	30,997.1	5,792.3	25,204.8
1982	69,393.6	39,255.2	33,251.7	6,003.5	30,138.4	5,653.6	24,484.9
1983	75,254.4	40,746.4	33,535.7	7,210.7	34,508.1	9,006.4	25,501.6
1984	86,812.9	41,786.3	33,782.4	8,003.5	45,026.6	19,142.1	25,884.4
1985	72,984.9	28,840.9	20,009.0	8,831.9	44,144.0	16,368.9	27,775.1
1986	96,341.3	44,392.3	38,014.4	6,377.9	51,949.0	21,473.3	30,475.7
1987	114,628.2	54,564.8	46,559.4	8,005.4	60,063.4	25,856.6	34,206.9
1988	123,322.8	62,239.5	52,310.9	9,928.6	61,083.3	22,776.4	38,306.9
1989	146,361.9	74,252.0	62,384.0	11,868.0	72,109.9	26,137.2	45,972.7
1990	164,271.8	79,053.0	68,806.0	10,247.0	85,218.8	22,614.3	62,604.5

資料: 韓国人蔘製品工業協会

料蔘の輸出から製品の輸出へ、すなわち加工輸出型へと転換したことを意味するものであり、それだけ付加価値を高めたものとして、高く評価するに値する。とくに1990年の白蔘製品の輸出が1989年に比べて36.2%増加したことは、驚くべき成長であると言える⁽¹⁶⁾。いずれにせよ、直接消費者に利用される形での付加価値の高い(第2次)製品の輸出動向が、今後ますます重要な位置を占めていくと考えられる。

ここで、高麗人蔘の輸出実績の推移が原料輸出と加工製品輸出において持つ意味の相違に関連して、ふたたび表21にもどって紅蔘とその製品および白蔘とその製品の比率をみてみよう。1990年には紅蔘とその製品が48.1%であり、白蔘とその製品は51.9%であった。紅蔘類の輸出のなかに占める紅蔘の比率は87.0%で、白蔘類の場合には白蔘製品が73.5%を占めている。すなわち紅蔘類の場合には原形の人蔘が主に輸出されるのに対して、白蔘類の場合には価額でみる限り白蔘製品が過半を占めるといふ大きな差異をみせているのである。しかし1971年から1990年までの輸出増加率についてみると、紅蔘類については紅蔘が10.9倍増、紅蔘製品が29.5倍増であるのに対して、白蔘類については白蔘が5.4倍増、白蔘製品が34.9倍増と、紅蔘類も白蔘類も原形よりも製品での輸出増加率が高い。原形維持蔘よりも製品輸出の伸び率が高いことは、韓国の高麗人蔘産業全体の動向として、次第に高付加価値の製品輸出に重点を置くようになってきていることを示しているのである。

表22は、1990年の高麗人蔘製品(白蔘製品)の輸出実績をみたものである。国別には香港への3,009万ドルを先頭に、日本、アメリカ、イ

タリア、インド、ドイツの6カ国に5,592万ドルとなっており、以上で輸出総価額の89.3%を占めている。これらの国における人蔘製品の選好度を各国への輸出額のなかで占める比率からみてみよう。

まず香港の場合、人蔘精が91.7%を占め濃縮エキスタイプがほとんどを占めてはいるものの、一般的には高麗人蔘は薬材であるという固定観念が根強く残っているため人蔘製品よりは原形維持蔘が好まれており、人蔘製品と原形維持蔘の市場需要は大体3対7程度である。日本の場合は、人蔘精が72.6%、人蔘茶が14.0%、人蔘ドリンクが7.0%を占め、この3種類が全体の93.6%以上を占めており、日本国内販売においては、濃縮タイプ、カプセル、丸(pill)類は医薬品として、顆粒タイプやその他の製品は健康食品として分類され販売されている。反面、アメリカは人蔘茶が68.7%、人蔘ドリンクが12.4%、人蔘精が7.5%を占め、アジア系の移民を中心に飲みやすい茶類が最も好まれており、アメリカでは高麗人蔘は健康食品であるとの認識が強い。その他、ドイツの場合は、人蔘精粉が75.5%を占め最も高い比率を示しており、この人蔘精粉は100%純粋人蔘エキスを瞬間噴霧乾燥機で粉末化したもので、ドイツではカプセルやトニック製品類の原料として使用されており、人蔘類は医薬品として分類されている。

ところが、高麗人蔘製品を製造する国としては、広義の人蔘を栽培する韓国、日本、中国、北朝鮮、カナダ、アメリカはもちろんであるが、韓国、人蔘などを原料として輸入し、自国で製品に加工製造するドイツ、スイス、イギリスなどがあり、これらの国々で製造される製品として流通するものは、表23に示した通りである。

(16)この表20、表21の金額がさきの表17と一致しないのは、表17の場合には高麗人蔘の第2次製品の分を含んでいないためである。

東アジアにおける高麗人蔘の国際市場

表 22 高麗人蔘（白蔘）製品の輸出実績（1990年）

（単位：ドル）

製品別 国名	人蔘茶	人蔘精	人蔘粉	人蔘精粉	人蔘 カプセル	人蔘 ドリンク	その他	合計
日本	2,574,902	13,357,735	223,506	604,205	52,996	1,286,737	288,814	18,388,895
香港	1,558,658	27,587,655	369,358		32,488	87,105	458,417	30,093,681
台湾	100,601	32,585				204,201	387,236	724,623
シンガポール	204,460	147,431			70,513	246,235	288,792	957,431
フィリピン	1,677		58,564					60,241
タイ	47,562	164,291		810	23,423	19,319	1,625	257,030
インドネシア	174,961	32,638					60,751	268,350
マレーシア	10,270	60,140	5,773	1,003	14,871	3,967	8,037	104,061
インド		169,009	375,147	649,840				1,193,996
スリランカ					2,204			2,204
ベトナム	111,847							111,847
サウジアラビア						137,793		137,793
オマーン					2,611			2,611
アイボリー Coast	3,426	2,756			3,594	14,964		24,740
アラブ首長国連邦	1,590					55,588	741	57,919
イスラエル	10,504				19,365			29,869
カタール					2,400			2,400
カメルーン	5,436	16,025			3,625		3,541	28,627
南アフリカ	2,634	1,595	32,301		2,494			39,024
アルバ	61				207			268
アメリカ	2,645,535	288,819	151,045	53,750	29,785	447,882	208,301	3,855,117
カナダ	240,206	2,668			18,396	10,097	797	272,164
チリ			3,365					3,365
ペルー	848	20,509			10,870			32,227
メキシコ	426,111	25,539	43,451			90,830	46,091	632,022
ブラジル	115,206	6,621	17,280		116,075	6,150	31,874	293,206
パナマ	47,529				1,385	2,471		51,385
アルゼンチン		9,264						9,264
パラグアイ	5,352				5,385			10,737
ドイツ	62,519	158,035	28,400	789,089	215	7,030		1,045,288
スイス	23,332	32,733	364,818		1,001			421,884
イタリア	123,468	1,025,523	6,200	5,149	132,033	28,354	17,254	1,337,981
ベルギー	18,342	34,801	25,450	22,736	25,486			126,815
ポルトガル	23,592	2,695	7,160		22,107	15,374	6,100	77,028
スペイン	212,723	222,135	23,945		384,333	248	394	843,778
デンマーク		1,481			3,954	132		5,567
オランダ	19,376	89,498	4,551		76,924	1,550		191,899
フランス	88,029	70,678	18,215		14,118	7,158	7,158	205,356
イギリス	35,270	136,573			37,901	20,062	194	230,000
ギリシア	3,480	18,580			7,287			29,347
スウェーデン		53,082			22,200		4,780	80,062
ノルウェー	1,551	83,454			15,071	85		100,161
ユーゴスラビア							16,603	16,603
オーストラリア	107,606	48,642	27,730	2,337	6,465	10,862		203,642
ニュージーランド	6,707	15,283			11,907		707	34,604
グアム						6,329		6,329
マルタ	1,059	1,199			837			3,095
累 計	9,016,430	43,919,672	1,786,259	2,128,919	1,174,526	2,740,523	1,838,207	62,604,536

資料：『主要業務統計』（韓国人蔘製品工業協会、1991年）

製造品目別にみると、人蔘茶類は日本10種類、中国2種類、北朝鮮1種類の3カ国で13種類が製造されており、人蔘精類は中国、日本、ドイツなどの8カ国で23種類が製造され、品目類では最も高い比重を占めている。また地域別に製品の製造動向をみると、ヨーロッパとアメリカでは服用と携帯に便利なタブレットやカプセル類が中心を成しており、東アジア地域で濃縮エキス（精）類が中心を成すのと対照的である。具体的に、中国では丸型の製形が最も好まれており、日本では茶類が、ドイツではカプセル類が中心を成している。

このような動向に対して、韓国における人蔘製品の開発現況をみると、表24の通りである。1980年代から複合製品が増えつつあるとはい

え、1989年12月現在、品目別にみると、人蔘茶類が8種類で最も多く、次いで人蔘瓶・缶詰類が7種類を占めており、その他に人蔘菓子類（5種類）、人蔘カプセル類（3種類）など33種類にも及んでいて、人蔘を主原料とする単純製品の特長をもつ製品が大部分を占めている。しかしながら、近年、人蔘の需要が増加傾向にある欧米や日本の人蔘の加工製品は、単純処方製形を持つことよりは複合的で飲みやすく、さらに携帯に利便性をもつ、天然的な複合製品の生産を企てている趨勢にある。今後、低価格の原料蔘中心の中国蔘が氾濫する国際市場において、韓国の人蔘産業が生き残るためには、付加価値の高い、高品質の複合製品の開発が最も肝要な課題であろう。

表23 海外における高麗人蔘加工製品類の製造動向（1989年現在 12カ国、101品目）（単位：個数）

地域\国名\製形		茶	精	粉末	カプセル	タブレット	丸	ドリンク	計（％）
ヨーロッパ	ドイツ		3	2	9	3		11	28
	スイス		1		2			1	4
	オランダ		1						1
	ベルギー							1	2
	スウェーデン				1	1			1
	イギリス					4			4
小計		0	5	2	12	8	0	13	40 (39.6)
北米	アメリカ				3	3			6
	カナダ		1	1					2
小計		0	1	1	3	3	0	0	8 (7.9)
東アジア	日本	10	4		4			2	20
	旧ソ連		1						1
	中国	2	9		2		12		25
	北朝鮮	1	3	1	1	1			7
小計		13	17	1	7	1	12	2	53 (52.5)
合計	品目数	13	23	4	22	12	12	15	101(100.0)
	構成比（％）	12.9	22.8	4.0	21.8	11.9	11.9	14.9	100.0%

資料：韓国人蔘製品工業協会

表 24 高麗人蔘製品の品目別開発の現況
(1989年12月現在)

種 類	品 目	種 類	品 目
濃縮人蔘類	1. 人蔘精 2. 人蔘精粉	人蔘瓶・缶詰め	1. 蔘鶏湯 2. 蔘鶏精 3. 人蔘汁 4. 人蔘ジュース 5. 人蔘湯 6. 人蔘粥 7. 人蔘キムチ
人蔘粉末	1. 人蔘粉末 2. 人蔘精粉		
人蔘茶類	1. 人蔘茶 2. 人蔘霊芝茶 3. 人蔘葉緑茶 4. 人蔘葉緑花茶 5. 人蔘精茶 6. 人蔘精頓 7. 蜂蜜人蔘精茶 8. 人蔘杜仲茶	人蔘菓子類	1. 人蔘ガム 2. 人蔘キャンデー 3. 人蔘カラメル 4. 人蔘チョコレート 5. 人蔘ジェリー
		糖浸人蔘類	1. 糖蔘 2. 蜂蜜片人蔘
人蔘飲料類	1. 人蔘ドリンク 2. 人蔘鹿茸D 3. 人蔘鳳凰壯 4. 人蔘ネクター	人蔘カプセル (錠)類	1. 人蔘精カプセル 2. 人蔘粉カプセル 3. 人蔘タブレット
		8種	33品目

資料：韓国人蔘製品工業協会

一方、韓国からの高麗人蔘製品の主要輸出国について表 25 をみると、1986 年までは日本が 60 % 以上を占めてトップであったのが、その後しだいに低下の傾向をたどり、1990 年には 30 % 以下に落ちている。反面、香港の場合は、1986 年までは 2.0 % 以下にすぎなかったのが、1987 年には前年度より 11.3 倍も急増し 20.0 % を占め、その後も増加を続けて 1988 年からは輸出実績が日本を圧倒してトップに躍り出ており、1990 年にはさらに拡大して 50 % 近くを占めるに至っている。アメリカとドイツは 10 % 前後を占めていたが、1990 年には 6.2 %、1.7 % と急激に低下している。アメリカの場合は、近

年、低価格の中国産が人蔘茶や人蔘エキスを中心に大量に輸入されていることによるものと考えられる。その他では、近年、シンガポール、インドなどへの輸出がはじまり、とくにインドへの増加率が目立っている。インドは輸入人蔘を国内で主に人蔘茶に加工して、そのほとんどをアメリカに輸出している。

次に、表 26 によって高麗人蔘製品の種類別の輸出実績をみると、このかん一貫して人蔘精と人蔘茶が輸出の大部分を占めており、とくに人蔘精が断然トップを占めている。これはさきに述べたように、人蔘精が人蔘の主要消費国である香港と日本を中心に輸出されていることと、とくに香港が人蔘の輸出相手国として近年量的に飛躍的増大を遂げていることによるものと考えられる。人蔘精粉は、1989 年まではほとんどドイツに向けられ、全体の 9 % 前後を占

めていたのが、1990 年には前年度の半分以下になって 3 % を若干上回る程度になっている。前の表 22 をみると、1990 年の人蔘精粉の輸出のなかで占めるドイツの割合が 37.1 % と低下しており、その他のインド、日本が各々 30.5 %、28.4 % となっている。インドへの輸出が 1987 年から人蔘精粉を中心にはじめられ、その後増加傾向をたどっていることから考えると、1990 年の急激な低下は、おそらくドイツにおけるなんらかの事情によるものと考えられる。ともあれ、人蔘精と人蔘茶を除いてはほとんどの製品が横ばいまたは低下にあるなかで、1990 年にはとくに人蔘精が 70 % 以上という圧倒的な割合を占めていることがみてとれる。

以上のような動向を全体として考えてみれば、高麗人蔘の代名詞のようになってきた人蔘茶、人蔘精のほかに、製品の多様化が輸出段階

表 25 高麗人蔘（白蔘）製品の国別輸出実績（上位 10 まで）

（単位：千ドル、%、%）

年次 国名	1984 年		1985 年		1986 年		1987 年		1988 年		1989 年		1990 年							
	輸出額	占有率	輸出額	占有率	輸出額	占有率	輸出額	占有率	輸出額	占有率	輸出額	占有率	輸出額	占有率						
日本	15,771	60.9	17,025	61.3	19,406	63.7	14.0	16,187	47.3	△16.6	11,280	29.4	△30.3	11,405	24.8	1.1	18,389	29.4	61.2	
アメリカ	2,596	10.0	2,903	10.5	3,229	10.6	11.2	3,091	9.0	△4.3	4,241	11.1	37.2	4,115	9.0	△3.0	3,855	6.2	△6.3	
スイス	2,294	8.9	279	1.0	△87.8	347	1.1	24.4	301	0.8	521	1.1	73.1	1,338	2.1	1,045	1.7	△73.3		
イタリア	1,075	4.2	938	3.4	△12.7	527	1.7	△43.8	700	2.0	32.8	3.8	107.0	3,915	8.5	8.9	844	1.3	64.2	
ドイツ	708	2.7	3,207	11.6	353.0	2,917	9.6	△9.0	3,420	10.0	17.2	3,595	9.4	5.1	3,915	8.5	8.9	844	1.3	64.2
スペイン	458	1.8	550	2.0	20.1	588	1.9	6.9	554	1.6	△5.8	1,054	2.8	90.3	514	1.1	△51.2	844	1.3	64.2
マレーシア	454	1.8																		
サウジアラビア	453	1.8	248	0.9	△45.3	604	2.0	56.1	6,815	20.0	1028.3	313	76.1	18,461	40.2	53.9	30,094	48.1	63.0	
香港	436	1.7	389	1.4	△10.8	233	0.8	215.2						630	1.4		725	1.2	15.1	
台湾	185	0.7																		
カナダ			329	1.2				485	1.4		322	0.8	△33.6							
フランス			270	1.0				231	0.7											
イスラエル								315	0.9											
イギリス								413	1.2											
シンガポール																				
インド																				
メキシコ																				

資料：前掲『主要業務統計』各年度より作成。

表 26 高麗人蔘（白蔘）製品の種類別輸出実績

（単位：ドル、%、%）

年次 製品	1984 年		1985 年		1986 年		1987 年		1988 年		1989 年		1990 年	
	輸出実績	占有率	輸出実績	占有率	輸出実績	占有率	輸出実績	占有率	輸出実績	占有率	輸出実績	占有率	輸出実績	占有率
人蔘茶	4,897,658	18.9	5,992,476	21.4	7,219,291	23.7	7,836,693	22.9	9,698,819	25.3	8,261,582	18.0	9,016,430	14.4
人蔘精	15,187,161	58.7	16,771,361	60.4	15,279,951	50.1	15,459,091	45.2	15,551,426	40.6	24,221,301	52.7	43,919,672	70.2
人蔘粉	736,271	2.8	1,359,340	4.9	1,688,982	5.6	1,803,287	5.3	3,059,057	8.0	2,798,912	6.1	1,796,259	2.9
人蔘糖粉	2,414,457	9.3	1,542,960	5.6	2,500,968	8.2	3,090,671	9.0	3,594,048	9.4	4,516,887	9.8	2,128,919	3.4
人蔘カプセル	448,328	1.7	509,114	1.8	818,777	2.7	794,041	2.2	871,673	2.3	1,106,648	2.4	1,174,526	1.9
人蔘ドリンク	1,045,329	4.0	805,410	2.9	2,159,667	7.1	3,500,682	10.2	3,511,578	9.2	2,751,394	6.0	2,740,523	4.4
その他	1,155,215	4.5	854,423	3.1	807,067	2.7	1,782,402	5.2	2,020,306	5.3	2,316,025	5.0	1,838,207	2.9
計	25,884,419	100	27,775,084	100	30,475,703	100	34,206,867	100	38,306,907	100	45,912,749	100	62,604,536	100

資料：前掲『主要業務統計』各年度より作成。

でもすすんでいることが窺えるが、しかしながら量的に多くを占めるのは人蔘精と人蔘茶の2品目にしぼられており、製品の多様化が販路を広げていくためには、輸出相手国別の多角的マーケティング戦略が要求されるであろう。

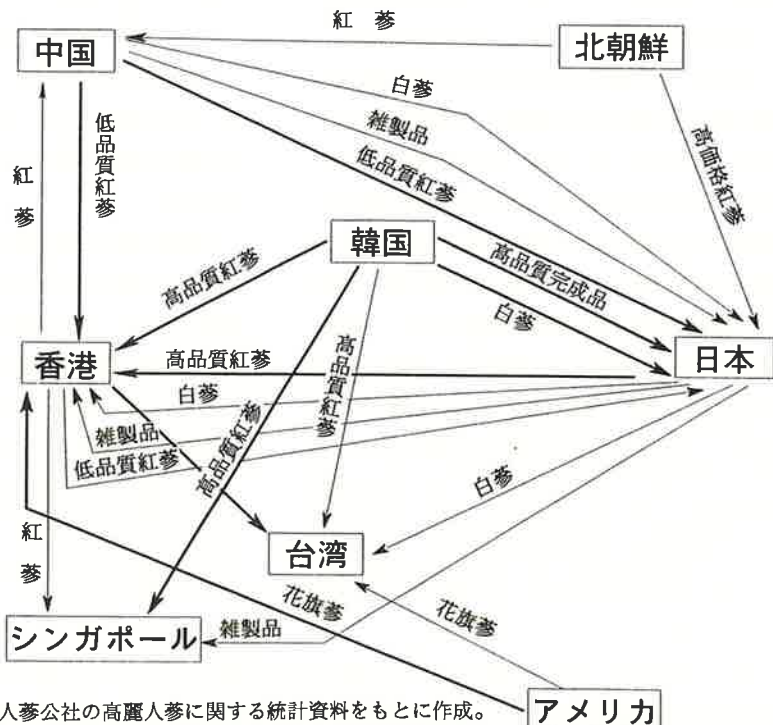
4. 東アジアにおける高麗人蔘の国際市場

以上、日本と韓国における高麗人蔘の輸出入の動向を、その第2次製品を含めて、具体的に検討してきた。高麗人蔘の生産と流通、および消費に占める両国の位置からみて、以上の検討の内容を東アジア地域に拡大して、この地域にお

ける高麗人蔘の国際市場のあり方について、大づかみな見取り図を描いてみる事が可能であろう。これを図示してみたのが、図1である。

ここで韓国からシンガポール・香港への輸出品が高品質の紅蔘を中心に行っていると考えたのは、表17にみる韓国から輸出品のキログラムあたり単価が、白蔘中心の日本への輸出品の単価の2～3倍に及んでいること⁽¹⁷⁾、表18にみる香港への韓国からの輸入単価は高品質紅蔘を中心とする日本からの輸入単価にほぼ匹敵しているという事実に基づいている⁽¹⁸⁾。また、中国から香港へ輸出されるのが低品質紅蔘を中心としていると考えたのは、日本向輸出についてみた前掲の表12の中国産紅蔘の低価格と、表

図1 東アジアにおける高麗人蔘の国際市場



資料：本文及び韓国タバコ人蔘公社の高麗人蔘に関する統計資料をもとに作成。

(17)表17から単価を計算すると、1988年の場合、韓国からシンガポール向に輸出される高麗人蔘の単価はキログラム当たり242ドル、香港向のそれは165ドルであるのに対し、日本向のそれは95ドルであった。1990年にはそれは、それぞれ284ドル、226ドル、105ドルとなり、価格差はいっそうひろがる。

(18)表18から計算すると、1985年には韓国から香港に輸出される高麗人蔘のキログラム当り単価は1,312香港ドル、日本からのものは900香港ドルであった。1989年にはそれが1,248香港ドルと1,317香港ドルとなる。

18 にみる香港向に輸出される中国産人蔘の単価の安さが完全に照応している⁽¹⁹⁾からである。香港から各国へ再輸出されるもののうち、シンガポール向の単価がきわだって高いこと⁽²⁰⁾から、それを高品質紅蔘であると考えた。

ともあれ、図1から、さきに述べた、高品質紅蔘とその他の高麗人蔘第1次製品および第2次製品の国際市場における異なった流通ルートと相互の関連について、結論的にほぼ次のようにまとめておくことができる。低品質紅蔘の大量供給国である中国から日本と香港・シンガポールなどに輸出されたそれは、国内で消費されると同時に一部は高品質の人蔘製品に再加工され、そこから世界にむかっていく。高品質紅蔘の生産国である韓国は、日本には白蔘と第2次製品を、香港とシンガポールには高品質紅蔘と第2次製品を輸出し、同じく世界にむかっていく。韓国から日本に輸入された白蔘と第2次製品のかなりの部分が高品質の人蔘製品に再加工されると考えられることは、前述の通りである。

このようにしてみると、日本の高麗人蔘は、国際市場では品質において韓国産の高品質紅蔘と競争しなければならず、国内市場では、品質の面では韓国産の高品質第2次製品と、一部は北朝鮮産の高品質紅蔘との競争に、価格では中国産の低品質紅蔘（香港経由で輸入されるものを含む）および韓国産の白蔘との競争にさらされているということが明らかになる。高品質のブランド性を持って国際市場に確固とした地位を築いてきた韓国の場合も、中国産の安価な紅

蔘が大量に供給される国際市場において、従来と同様の地位を保っていくことができるかどうか、必ずしも楽観を許さない。これに加えて、潜在的にはかなりの輸出能力を持つとみられる北朝鮮産の高麗人蔘が本格的に国際市場に登場してくることになると⁽²¹⁾、各国間の競争は一層激化していくことになるかも知れない。

しかし、国際競争の時代は、視点を変えれば経済交流を通じた国際協力が一層強く求められる時代でもある。今日、韓国・北朝鮮や中国・旧ソ連を含む東アジア各国・各地域間の経済交流と経済協力はかつてなかったほど活発に展開しているし、そこでは国民経済の利害が正面から衝突することのない「地域と地域」「人と人」との交流と協力が模索されている⁽²²⁾。高麗人蔘に関して、冒頭で触れたように、すでに韓国タバコ人蔘公社が中国吉林省（朝鮮族居住地域）の人蔘栽培に技術指導をはじめている。低価格・低品質の紅蔘の大量供給という中国の高麗人蔘産業の体質が是正される契機になるかも知れない。

高齢化社会の到来と成人病の増加、さらに地球環境の保全が叫ばれる今日、無公害の自然食品としても、漢方薬としても、健康食品としても、高麗人蔘の市場そのものを大きく拡大していくことは可能であろう。各国産の高麗人蔘の品質の特徴を生かした製品の種別多様化と相互協力を通して、東アジア各国の高麗人蔘業は東アジアの枠を越えて、世界の市場へとばばたいていく途を模索していくべきであろう。

(19) 中国から香港に輸出される高麗人蔘のキログラム当たり単価は、表18から計算すると、1985年に419香港ドル、1989年に213香港ドルであった。これを前註で示した韓国および日本からの輸入品単価と比較すれば、中国産がきわだって低価格であることは明瞭であろう。

(20) 1989年についてみると、シンガポール向のキログラム当り単価は871香港ドルで、中国向の434香港ドル、日本向の288香港ドル、台湾向の233香港ドルを圧倒している。

(21) 旧ソ連のルーブルがハード・カレンシーとしての地位を失った今日、対外決済手段を求めて北朝鮮の高麗人蔘が大量に国際市場に登場する事態が起こりうるであろう。

(22) 小川雄平編著『アジア共生の時代』（同友館、1991年）